

# 外来語表記のゆれに関する考察

## —「トピック」と「トピックス」—

十重田 和 由

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 分析
- 3 考察
- 4 おわりに

### 1 はじめに

本稿の目的は日本語に存在する外来語の語形態のゆれについて形態論的および通時的に考察することである。外国語が日本語に流入する場合、一般的には元の言語での単数形の形で日本語に外来語として定着することが多い<sup>1)</sup>。‘話題’を表す日本語の外来語に「トピック」という語が存在するが、この単語の日本語での外来語としての形態は「トピック」なのか「トピックス」なのかについては言語学的に‘ゆれ’があるように見える。「トピックス」という語形態の使用者は、語が表す指示物(referent)の単数・複数に関わらず「トピックス」を使う傾向が見られる。本稿では、「トピック」・「トピックス」の‘ゆれ’に関して、この外来語の流入・発達について歴史的に考察し、その‘ゆれ’の原因および、複数形である「トピックス」が存在する理由について検討する。

このテーマについて調査をするきっかけとなったのは、筆者が当然と思っていた「トピック」という形の外来語の語形態と、若年層の会話や文書等で耳目にする「トピックス」という形態との間のずれを認識したことである。大学生が書く小論文の中で「トピックス」という表現が多く見られることがあり、「トピック」という語形態が標準形であると思い込んでいた筆者は違和感を覚えた。

---

<sup>1)</sup>ここで言う‘外来語’とはかなりの頻度で常用され定着したものであるが、厳密で厳格な定義は存在しない。外国語が定着する過程においてどの時点で外来語と判断するかは人によって、または辞書等の編集者によって異なる。

当初、このずれは世代による標準形の違いだろうと判断したのだが、筆者の周囲でのこの語の用法を観察してみると40歳代の日本人も「トピックス」という語形態を使用することがわかった。つまり、この‘ゆれ’は単純な、年代層による用法の違いとは限らないのである。

以下、これらの語の用法について、参考書籍、インターネット、新聞を調査対象として、具体的に検証する。

## 2 分析

本節では参考書籍、インターネット、新聞で「トピック」・「トピックス」という二つの語形態がどのように扱われているかについて分析を行い、それらのメディアでの扱いの違いについて比較検討する。

### 2-1 調査方法

本調査ではインフォーマントを対象に調査を行う形をとらずに、参考書籍、インターネット、新聞という媒体に絞り、そこでの使用状況について調査を行った。話し言葉と書き言葉で、使用法に違いがでる可能性はあるが、本稿では語の定着度を測るという意図のもと、書き言葉での「トピック」・「トピックス」の対比について考察する。

これらの調査対象で「トピック」・「トピックス」の使用および用法を調査・比較し、それらの事例について詳細に分析した。そして、「トピック」・「トピックス」という語の均衡、何故複数形の「トピックス」が存在するのか、また「トピック」と「トピックス」が混在する理由について考察を試みた。

### 2-2 参考書籍での表記

果たして参考書籍は「トピック」・「トピックス」の表記をどう扱っているか『広辞苑』を参照した。『広辞苑』を初版から五版までを比較してみると以下ようになる。

トピック【topic】①題目。論題。②話のたね。話題。（初版：1955年）

トピック【topic(s)】①題目。論題。②話のたね。話題。トピックス。（2版：1969年）

トピック【topic(s)】①題目。論題。②話のたね。話題。トピックス。（3版：1983年）

トピック【topic(s)】①題目。論題。②話のたね。話題。トピックス。（4版：1991年）

トピック【topic(s)】①題目。論題。②話のたね。話題。トピックス。（5版：1998年）

全ての版において見出し語は「トピック」であり、1998年の最新版でさえ「トピック」という形態が用いられている。参考書籍の表記というのは必ずしも市井の言語事象を反映しているとはいえない

いが、少なくとも『広辞苑』の編者は「トピック」という語形態が標準形であると判断していることになる。

ただし一つ興味深い点は2版から語義中に「トピックス」という語が見られることである。初版とそれ以降の版の間でのこの語義の違いが意味するのは、初版が出版された1955年から2版が出版された1969年までの間の言語使用の変化に対応して『広辞苑』の編者が第2義に「トピックス」という語を付け足すことが適切であると判断したということだと思われる。つまり、「トピックス」という語形態が1969年までの間に人々の間でかなり浸透していたということである。ただし、『広辞苑』ではこのような一部の変化は見られるが、標準形は「トピック」という単数形とみなされていることが確認できる。

### 2-3 インターネットにおける「トピック」・「トピックス」の使用

前項で、参考書籍における表記では必ずしも一般的な語法が反映されていない可能性が示唆された。従って、ここでは、人々の間に広く浸透しており、一般的な語法が氾濫するインターネットで「トピック」・「トピックス」の使用法にどのような特徴が見られるかについて検討する。

サーチエンジン（[www.google.co.jp/](http://www.google.co.jp/)）で両語を検索してみると、「トピックス」は「トピック」のおよそ2倍ヒットした<sup>2)</sup>。この数値は、「トピックス」という語形態が広く浸透していることの現れと解釈することができる。

インターネットのサーチエンジンで「トピックス」を検索してヒットしたページを実際に見てみると、この語はホームページの見出しに頻繁に使用されていることがわかる。例えば以下のような例がある。

「主なトピックス」(<http://news.www.infoseek.co.jp/>)

「宝くじトピックス」(<http://www.takarakuji.mizuhobank.co.jp/>)

「感染症トピックス」(<http://idsc.nih.go.jp/>)

一方で「トピック」でインターネットを検索してみると以下のような用例が見つかる。

「新着トピック」(<http://bbs.arukikata.co.jp/>)

この両語形態のインターネットでの用法を比較してみると「トピック」・「トピックス」の使いわけはあまりなされていないようである。例えば、「新着トピック」は「トピック」の集合体に対する見出しであるのに単数形が用いられている。上記の用例のように、「トピック」・「トピックス」どちらの語形態も見出しに使用されていることがわかる。同様に、見出し以外でも「トピック」・「トピックス」はどちらの語も相補することでできるような用例が多く見られた。

<sup>2)</sup> 「トピックス」と「トピック」のヒット件数は805,000対489,000。(2004年1月4日調査実施)

今回の調査では、これらの「トピック」・「トピックス」で検索したページ全てを分析してはいない。従って、あくまでも語法の傾向に関する示唆のレベルであるが、インターネットでは「トピック」・「トピックス」両方の語形態が共存していることは間違いないようである。

## 2-4 新聞での使用状況：朝日新聞

新聞の調査では、コーパスを『朝日新聞』の東京版の朝刊・夕刊の本文のみとした。オンラインのデータベースと縮刷版を利用し、1993年1月1日から2002年12月31日までの10年間分を対象とした。以下が使用例の頻度を年度ごとに表示したものである。

表1 「トピック」・「トピックス」の朝日新聞における用例数

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
トピック	5	4	6	4	4	6	10	9	6	8
トピックス	7	4	8	7	6	6	10	6	2	2
その他	3	1	5	4	1	4	3	7	6	1
合計	15	9	19	15	11	16	23	22	14	11

(注) 表中の「その他」には、「」等に入って文中に現れる固有名詞や見出し、ただ単に「アトピック(atopic)」などのように関連しない語などを含む。これらは基本的には「トピック」・「トピックス」の用例の対象外であるが、参考までに表に組み入れた。

この表をみると1993年から2002年の間、「トピックス」がかなりの頻度で使用されていて、市民権を得ていることが伺われる。さらに、1993年から2000年までは「トピックス」という形態が「トピック」と同等、もしくはそれ以上の頻度で使われている。この現象は前項の「参考書籍での表記」で得られた、「トピック」という語形態の優位性とは相反する現象である。ただし、調査した年代の朝日新聞での全体の用例数が多くはなく、歴然として差があるというよりも均衡しているといえる。この点については、コーパスをさらに大きくして調査する必要はあるだろう。

興味深い点は2000年以前は「トピックス」が「トピック」と同等もしくはそれ以上の頻度で現れるのに対し、2001年・2002年は「トピック」がそれぞれ「トピックス」の3倍・4倍の数値で現れることである。この逆転現象は何故起こったのか、そしてこの傾向は2003年以降も続いていくのかは今後の年度のデータが集まった段階で再び検討したい。

## 2-5 使用例の分析

「トピック」、「トピックス」どちらの語形態にせよ、選択肢として存在する語が一つならば、日本語の慣例に従い、単数を表す場合にも複数を表す場合にもその語が使用されるのが自然だと思われる。しかし、「トピック」・「トピックス」の場合は二語が共存しているため様々な使用法が存在している。ここでは、「トピック」・「トピックス」の具体的な使用例について分析したいと思う。

主に4つのカテゴリーに分類できる：(1) 単数を表す「トピック」、(2) 複数を表す「トピック」、(3) 単数を表す「トピックス」、(4) 複数を表す「トピックス」。以下のそれらの代表的な例を示し、用法について検証したい<sup>3)</sup>。

(1) 単数を表す「トピック」

「ざっと三十カ国、二百人以上が集まるから、考えされることが多い。日本では絶対にありえないことも起こる。今年のトピックはボスニア・ヘルツェゴビナ。母国では敵同士の、ボスニアとセルビアの記者が並んだ。まずボスニアの日刊紙記者が話した。」(『朝日新聞』 1994年4月12日 朝刊 4面)

(2) 複数を表す「トピック」

「敵性語のいいかえ、金属回収、召集令状トピックに関しても、私たちの認識がいかにいい加減だったことか。この厚さは膨大な一次資料の引用によるもの。これは単なる批判を超えた第一級のノンフィクションといっている。」(『朝日新聞』 1999年7月4日 朝刊 17面)

(3) 単数を表す「トピックス」

「報告書は公式、非公式のルートで入手した雇い兵に関する情報を記述している。今回の報告書は、雇い兵に関するトピックスとして、アフリカで過去十六年にわたり、様々な雇い兵活動にかかわってきたフランス人、ボブ・デナール氏が、今年二月に南アフリカ共和国からフランスに帰国したという情報から始まる。」(『朝日新聞』 1993年11月24日 夕刊 5面)

(4) 複数を表す「トピックス」

「日本海洋学会の創立60周年を記念してまとめられた。20編のトピックスから、関心のあるテーマを読むだけでもよい。海の深さをちょっぴりのぞいた気にさせてくれる。」(『朝日新聞』 2001年11月4日 朝刊 13面)

上記の例のなかで(2)と(3)のカテゴリーに入る用例が語法的に興味深い。本来の‘topic’という語を考えるのならば「トピック」は単数を表す場合に使われるのが自然である。しかし、(2)では‘敵性語のいいかえ’、‘金属回収’、‘召集令状’と3つ(複数)の要素が羅列されているにもかかわらず「トピック」という単数の語形態が用いられている。一方で、(3)のように、トピックの対象が‘雇い兵’だけであるにもかかわらず「トピックス」が使われている例もある。

これらの用法が意味するものは「トピック」・「トピックス」どちらを用いるにしてもその際の指示物が単数であるのか複数であるのかによつての使い分けは必ずしもされていないということである。

---

<sup>3)</sup> 引用文中の下線は筆者による。

## 2-6 日本語と英語での単数・複数の表記

日本語では単数・複数の区別を語形態で表さないことが少なくない。例えば、以下の例では食べたりんごの数は1つなのか、2つ以上なのかという情報は文字には現れない。従って、そこには意味の曖昧さが存在し、読み手がコンテキストで判断することになる。

・私はりんごを食べた。

このような曖昧さを避けたい場合、日本語では様々な表現方法を取り、その一つに具体的な数量を示す方法がある。以下がその例である。

・私はりんごを2個食べた。

また、この他にも「奴」の複数形を「奴ら」というように「ーら」などの語尾をつけることによる複数表示の仕方もあるが、実際には上記の「私はりんごを食べた。」の例のように無変化の場合が多くみられる。

一方、英語では‘desk’から‘desks’へと、語尾に‘-s’をつけることにより複数表記を行うことが一般的である。その際、‘two desks’や‘three desks’のように具体的な数詞を共に使うことも使わないことも可能である。

このような日本語と英語の複数の表記の仕方の違いを比較するならば、英語の単語が日本語に流入する場合、単数で定着するのが自然であるといえる。例えば「ストッキング」は英語では一般的に複数表記の‘stockings’、であるにも関わらず、日本語に入ると単数表記が落ちている。

## 2-7 複数形で定着したその他の外来語

‘根源’を表す外来語に「ルーツ」がある。これは英語の‘root’の複数形‘roots’であり、本来ならば「ルート」という語形態で日本語に外来語として定着するのが自然と思われる。しかし、この語の場合、『ルーツ』というTV番組の存在が大きいため「ルーツ」で定着したようだ。日本で放映され、ブームとなった年（1977年）以降の広辞苑の版をみると以前の版でも存在する「ルート」【root】という‘数学の根、平方根’を表す語に加えて、新たに「ルーツ」【roots】が現れている。

ルーツ【roots】①根。根元。根源。大本。②祖先。『広辞苑』3版

『広辞苑』3版（1983年）に「ルーツ」の見出し語が加わったという时期的な同調から判断して、この語の場合、社会現象ともなった人気番組の影響で「ルーツ」という語形態が定着したと判断できる。

ただし、「トピックス」の場合には「ルーツ」という複数語形態が定着したときのような、強い影響力を持つ社会的な事象は見あたらない。しかしながら「ルーツ」のように明らかな要因が見つかる場合は例外であり、一定の規則性が作用していると推定できるケースは少ない。複数で定着す

る外来語には「ソックス」のように元の言語で複数表示が普通‘socks’の単語がそのままの語形態を維持しているものが多いのが実情である。

### 3 考察

前節で検証した、インターネットおよび『朝日新聞』を対象とした調査により「トピック」と「トピックス」が様々な形で混在していることが判明した。本節では、何故「トピックス」という、本来は複数の語形態が外来語で定着したのか、また何故「トピック」と「トピックス」が共存しているのかについて理由を検討してみる。

「トピックス」が定着した理由であるが、これと言った強い理由は見当たらない。『広辞苑』初版では、「トピック」という見出し語が使われていて、かつ語義には「トピックス」という語は使われていないが、『広辞苑』2版より、「トピック」の語義に「トピックス」という表現が現れることは先に述べた。つまり、かなり早い段階で人々が「トピックス」という語形に慣れ親しんでいたことを表す。さらには、2版以降の『広辞苑』では【】内に入る原語表記にも複数表示の‘-s’が付け加えられ【topic(s)】という表示になっている。初版では、【topic】の表記である。

本来「トピック」となるのが自然であるのに「トピックス」という語も使われている現象の理由として、3つの要因が可能性として挙げられる。

#### (1) 他の外来語からの類推

日本語に定着している外来語には「-ス」という語尾を持つ語が多い。「アナリシス」、「カタルシス」、「サングラス」など様々な外来語が存在する。従って日本人は「-ス」という形の外来語に比較的なじみが深く、受け入れやすい音韻形態であると言える。この、日本人の耳目に慣れ親しんだ「-ス」という形からの類推で、本来は「トピック」であるところをつい「トピックス」と言ったり、書いてしまうことが積み重なるうちに「トピックス」が定着したというのは一つの可能性がある。

#### (2) 同音異義語の存在：TOPIX（東証株価指数）

東証株式指標（Tokyo Stock Price Index）が出現した1980年代後半以降「トピックス」という表現を目や耳にすることが増えたため、この同音異義語の影響で‘話題’を意味する「トピック」までも「トピック」よりも「トピックス」のほうが自然に聞こえるという類推作用が働いた可能性は高い。

#### (3) インターネットおよび Yahoo などのサーチエンジンの浸透

Yahoo のホームページを見ると「トピックス」という見出しがある。トピックの集まりに対するこの見出しは複数の「トピック」を表す。この Yahoo 日本語版ホームページの「トピックス」は

Yahoo 英語版ホームページの‘Topics’に対応・翻訳したものと思われるので同様のページ構成をもつ日本語版で「トピックス」という表記を使うのはある意味自然な流れである。コンピューターを頻繁に使う若年層における「トピックス」の定着はこの Yahoo のホームページおよび、その他の検索サイトで‘話題の集合体’を表して使われる「トピックス」の意味・用法の拡張と考えることができる。

これら上記の要因は「トピックス」という語が定着するのに少なからず貢献しているとは思われるが、どれも強い要因とはいえず、またその因果関係もはっきりしていない。特に(2), (3)で挙げた要因はごく最近の事象である。前出の『広辞苑』の通時的比較が示すように、「トピックス」という語はもっと以前に人々に使われていたと考えられ(2), (3)は「トピックス」が使われるようになった後にその定着を促進した要因と見るべきであろう。

#### 4 おわりに

本調査により、現代日本語で‘話題’を表す外来語の形態として「トピック」と「トピックス」両方が共存しており、本来それぞれの語が持つ属性である、単数・複数に関する使い分けは必ずしもされていないことが判明した。この現象はインターネットでも新聞でも顕著に見られた。しかし、参考書籍の見出しでは単数形の「トピック」のみである。つまり、実情では「トピック」・「トピックス」が共存しているが、言語変化に慎重に対応する参考書籍では「トピック」という語形態が維持されているということである。

これから先、「トピック」と「トピックス」の相関図がどのようになっていくのは現段階では傾向は見取れない。言語の変化は時間がかかるものであり、「ルーツ」のときのように圧倒的な影響をもつ要因が無い限りは徐々に変遷を遂げるのであろう。

この調査では、コーパスを新聞という媒体にのみ絞り「トピック」・「トピックス」の混在について、主に通時的アプローチを用いて指摘・検証を行った。しかし、研究対象となるコーパスを話し言葉まで広げ社会学的なアプローチを取り入れることによって、この言語現象の実態についてさらに多角的に考察することが可能になると思われる。

#### 参考文献

- 朝日新聞社 [1995-2003]、『朝日新聞縮刷版』、朝日新聞社  
荒川惣兵衛 [1967]、『角川外来語辞典』、角川書店。  
石綿敏雄 [1983]、『外来語と英語の谷間』、秋山書店。  
----- [2001]、『外来語の総合的研究』、東京堂出版。



- 榎垣実〔1966〕、『外来語辞典』、東京堂出版。
- 国語国立研究所編〔1990〕、『外来語の形成とその教育』、国立国語研究所。
- 白藤禮幸・杉浦克己〔1998〕、『国語学概論』、放送大学教育振興会
- 新村出編〔1955〕、『広辞苑』、初版、岩波書店。
- 新村出編〔1969〕、『広辞苑』、第二版、岩波書店。
- 新村出編〔1983〕、『広辞苑』、第三版、岩波書店。
- 新村出編〔1991〕、『広辞苑』、第四版、岩波書店。
- 新村出編〔1998〕、『広辞苑』、第五版、岩波書店。
- 深尾凱子〔1979〕、『カタカナことば』、サイマル出版会。
- 渡辺実〔1996〕、『日本語概説』、岩波出版。

e-reference

『朝日新聞オンライン』：<http://dna.asahi.com/>